

延山四季

武田海正

春 霧深く天女をまもる影嚮石

夏 春木川水音絶えて蟬の聲

秋 袈裟掛の松よりみゆる久遠寺

冬 雪ふみてひとりぬかつく御草庵

春秋八年を憶ひて
懐かしの友へ

孝 秀

この袖に來合せし人の縁かな

近詠數首

石井綠線

◇午睡よりさめてみつむる電氣カバーに

蠅二三匹戯れおれり

◇姿見の前に立ち居て妹は

ほゝゑみて居りさも嬉しげに

◇いつしかに兒は共々に歌ひ居ぬ

我吹き居りしハモニカの音に

◇秋の夜と鈴虫の音とともしひと

我に來りてかなしみを持つ

◇瀧に打たれ祈る人ありしふきさへ

つめたく思ふ今日此頃に

◇寥しさはいつ來たるらむ山里に

尾花亂れて秋風を吹く

夕べの想

中澤小樹

夕陽あわく落ちて行く

山のあなたを眺むれば

何時も悲しきもの懐ひ

うせにし友を思はれて

若草萌える野にふして

君とうたひし春の唄

自然の匠と一如して
想へば懐しバラダイス
タベチ曲にさすらへば
ラインの流その如く
アルプス連峰影映へて
いにしの姿かわらねど
有爲轉變は世のならひ
君は自然に歸れども
自然を慕ふ孤影あり
孤影の聲ぞこの詩篇

不變の理

中澤小樹

嗚呼鹿苑の朝より
跋提河畔の夕まで
横説堅説五十年
高さ理想のみ教も。

ヨルダン河に神の聲
洗禮うけたるキリストの
十字架上の極刑も
あゝ人類へのメシアなれ。
黄塵さかまく小町なる
辻に立ちての雄叫びも
寒山佐渡のかんなんも
一切衆生の救済ぞ。
げに大聖の一生は
煩惱の犬を逐ひやりて
苦提の鹿を招きつゝ
下化衆生への一路なる。
時世の流れ如何にせん
宇宙の眞理大聖の
遺命も阿片と捨て去りぬ
されど上求の人々よ
温古知新のその中に
不變眞理の輝きは